朝日新聞
2014.02.25

北の文化

コモンズによる地域の再生

小磯 修二　北大公共政策大学院特任教授

苫小牧市にあるアジアで最大規模の工業団地「苫東」には、広大な緑地、森林が広がっている。そこで地元の住民が主体となって森林の手入れや、ハスカップ摘み、薪づくり、さらにフットパスの整備など、人々が共同で利用するコモンズの活動が展開されている。所有者である株式会社苫東の理解を得て、その活動を担っているのが、NPO法人苫東環境コモンズだ。

このNPO法人は4年前に設立し、実践活動だけでなくコモンズの意義や取り組み事例についての調査研究活動を積み重ねてきている。私は当初からその研究活動に参加しているが、調査や議論を進めるなかで、コモンズによる社会システムを広めていくことがこれからの地域の再生に向けて重要ではないかという思いを強くするようになってきた。

コモンズという言葉は、狭い意味では入会地（いりあいち）などを指すが、私は「空間を共同で管理、利用することで空間の価値を高めていく仕組み」と広くとらえている。地域の活性化、発展に向けては、地域の限られた資源を、有効に生かし、その潜在力をしっかり発揮していくことが大切だ。しかし、現実には、地域資源の持つ価値を顕在化することを阻む、強固な排他、独占の仕組みが存在し、それをいかに打破していくかが大きな課題となっている。私はコモンズという概念に、この問題解決につながる可能性と魅力を感じている。

例えば、地方都市では中心部の空洞化や商店街の疲弊などが深刻な問題となっているが、都心部をコモンズとしてみんながより自由に利用できるようになれば、にぎわいを取り戻すことは可能だ。しかし日本では土地の私的所有権が強く守られており、都心部全体の価値向上よりも個々の土地や商店の利害に目が向く結果となっている。司馬遼太郎は晩年に、日本の国のかたちをゆがめているのは土地の所有制度だと主張し続けた。地球の一部である土地をひとびとの共有のもの、コモンズとして意識することで問題の解決が一歩進むという彼のメッセージは重い。

NPO法人苫東環境コモンズによる薪づくりの活動

連携・信頼通じた土地の共同利用を

◇◆◇

コモンズというと、米国の生物学者ハーディンの「コモンズの悲劇」がよく引用される。共用の放牧地に牛を放牧すると、みんなが放牧することで草がなくなり、牛は死んでいくというものだ。これは、人間がエゴで行動することを前提にしているが、現実には悲劇よりも、それを克服して地域の再生につなげる多くの知恵が醸成されてきている。それを明らかにしたのが、2009年に女性で初めてノーベル経済学賞を受賞した、エリノア・オストロムだ。彼女は、コモンズのガバナンスに関する研究で、利害対立を超えて、自主的に統治されるコモンズの可能性を実証的に示した。エゴではなく、連携、信頼関係によってコモンズが地域社会のシステムとして成り立つことを示した研究の意義は大きい。

北欧には、万人権という権利がある。ピクニック、乗馬、スキー、ベリーやキノコ摘みなどが、土地所有者の許可なく行う権利が認められている。国土がまさにコモンズなのだ。これは厳しい大自然と共生して生き抜く北欧の風土から生まれた伝統であり文化である。

◇◆◇

北海道には、大自然と向き合いながら地域社会をつくりあげてきたフロンティア開拓の精神と、そこから生まれた開放的な風土という伝統があり、コモンズが展開する可能性を秘めている。NPO法人苫東環境コモンズの取り組みは、北海道の風土から新しい文化を創造していく挑戦でもある。

◇

1948年、大阪市生まれ。前釧路公立大学学長。専門は地域開発政策、地域経済。著書に「地方が輝くために」（柏艪舎）、「コモンズ 地域の再生と創造」（北大出版会、共著）など。